

ロシア共産党の社会的構成

—一九一七〜一九二〇年—

尼川 創 二

【要約】 党員の質を重視するポリシエヴィキの伝統は、党が大衆政党、統治政党に変貌したのちも存続し、入党規則は時とともに厳しくなっていた。だが、党が自己の社会的構成に大きな注意を向けるのは、一九一九年の第八回党大会においてである。この大会では、労働者党員の比重の低下、ホワイトカラー党員の比重の増大、国家と党の官僚制化傾向、要職にある党員の横暴と腐敗、そして党の労働者・農民大衆からの遊離の傾向が確認されなければならなかった。第八回党大会は、党内の腐敗分子の除去と労働者・農民の積極的採用を決定し、大衆との結びつきを強めようとした。しかし、一九二〇年末までに様々の措置がとられたにもかかわらず、党の社会的構成は改善されなかった。労働者党員の比率は減少する一方であり、しかも、彼らの多くは、党と国家の機構内に吸収された。他方、行政的・事務的技術をもつホワイトカラー党員は、党内で堅固な地位を確保し続けた。

史林 六二卷三号 一九二九年五月

序

一九二一年夏、ロシア共産党^①は大規模な粛清に着手した。この粛清は、党内の腐敗分子や異分子を追放するとともに、労働者の比率を高めて党の社会的構成を改善することを目的としていた。この粛清が終了したとき、除名と脱党による労働者の総計は、粛清前の全党員の四分の一にも達していた。裏を返せば、この時期までにロシア共産党の社会的構成には、このような大規模な粛清を必要とするほどの、由々しい事態が生じていたことになる。だが、それはいかんにして生じたの

であろうか。

本稿では、少数の革命家・活動家の集団であったボリシエヴィキ党が大衆政党、そして統治政党へと変貌した一九一七年から、ネップ前夜の一九二〇年ごろまでの時期を中心に、党の社会的構成をめぐってどのような問題が生じ、いかなる意図のもとにどのような対策が講じられたかという点に、いくらかの照明を当てたい。一九二一年肅清については、紙幅の関係で本稿ではその概略に触れるにとどめ、全面的分析は別稿で果すことを、予めおことわりしておきたい。

ソ連では、革命後の数年間の「党建設」については、論集『B・II・レーニンとソビエト政権初期の数年間における党建設』をはじめ、コレスニコフ、アンドルーホフ、キタエフ等の研究があり、それらのなかで党の社会的構成とそれをめぐる諸問題がとりあげられている。しかし、それらの研究は、特定の事項については細かいデータを提供してくれるものの、総じて視角の固定化と問題点の掘り下げの浅さを感じさせる。特に、党指導部、党内反対派、党外大衆の相互関係が鮮明に描かれていない。国家と党の官僚制化傾向と党の社会的構成改善策とのつながりへの指摘もなされていない。ロシア共産党の社会的構成の問題を主題としているヴィドリンの論文も、表面的な事実の羅列に終始している観がある。

欧米の研究で、ロシア共産党の社会的構成の問題に最も多くの頁をさいているのは、リグビーの『ソ連共産党員』である。この研究は、一九一七年から今日までのソ連共産党の党員を様々な角度から考察したもので、この種の研究のなかでは最も詳しく、密度の高いものであり、本稿もこれに負うところが大きい。しかし、当時のソビエト・ロシアの困難な状況が充分考慮されていないし、また、特に、第八回党大会での党の社会的構成の改善の決定とその背景との関連の考察に物足りなさを覚える。たとえば、農民問題や党内反対派の動きとの関連が明らかにされていない。この第八回党大会での決定こそ、一九二一年肅清をも含む、その後の様々な改善策を導き出すものであり、筆者は、この決定を本稿の中心に据えて検討を加えたい。

① ロシア社会民主労働党(ボリシエヴィキ)——通称ボリシエヴィキ

党——は、一九一八年三月、ロシア共産党(ボリシエヴィキ)と改称

つた。同党は、その全連邦共産党（ネーションナル・ユニオン・オブ・連邦共産党）名を改めた。なお、本稿では、一九一八年二月までを露暦を用いている。

② «В. И. Ленин и строительство партии в первые годы Советской власти», М., 1965 (以下「В. И. Ленин и строительство...」と略)

③ А. К. Колесников. Ленинские принципы организационного руководства КПСС (октябрь 1917-1923 гг.), М., 1971; Н. П. Андрухов. Партийное строительство после Октября, 1917-1924 гг., М., 1973 (以下 Андрухов. ПС, 1917-1924 гг. と略); Еро же. Партийное строительство в период борьбы за победу социализма в СССР, 1917-1937 гг., М., 1977 (以下 Андрухов. ПС, 1917-1937 гг. と略); М. Кингев. Партийное строительство в годы гражданской войны, М., 1975.

④ Ф. А. Выдрин. Регулирование социального состава и роста РКП(б). — «Ленинские принципы партийного строительства в условиях перехода к социализму», М., 1970, стр. 61-110.

一 党の規模と社会的構成の概観

まず、冒頭に、ロシア共産党の規模と社会的構成の動態についての、最も基本的な資料をあげておこう。第1表は、ソ連共産党中央委員会機関誌『コムニスト』所収の論文「数字に見るソ連共産党」（一九六七年）から作成したものである。ここに示された数字は、資料に基づいてあらたに算定されたものとされており、現在のソ連の文献の多くは、この数字を用いているようである。^①

右の論文で言及されていなかった一九〇五年のポリシェヴィキの数だけは『ソビエト大百科事典』初版、第一一巻（一

⑤ T. H. Rigby, *Communist Party Membership in the U. S. S. R.*, Princeton, New Jersey, 1968.

本稿のサーベイに多少とも関連する欧米の研究書は枚挙にいとまがないが、主なものを次にあげる。E. H. Carr, *The Bolshevik Revolution, 1917-1923*, Pelican Books, vols. 1-2, 1966 [first published by Macmillan 1950-1952]; 原田・他訳『ネーションナル・キ革命』第一・二巻、オトチ書房、一九六七年; L. Schapiro, *The Communist Party of the Soviet Union*, New York, 1959; M. Fainsod, *How Russia is Ruled*, Revised edition, Cambridge, Mass., 1963; M. Liebman, *Leninism under Lenin*, London, 1975 [French edition 1973]. 一九〇七年のネーションナル・キとソ連のサーベイについては——D. Lane, *The Roots of the Russian Communism*, London, 1975 [Assen, 1969].

日本では、浜内謙『ソビエト政治史』、勁草書房、一九六二年、同『スターリン政治体制の成立』第一部、岩波書店、一九七〇年。

第1表 ロシア共産党の党員数

	党 員	党 員 候 補	合 計
1905年はじめ*	8,400*	存在しない	8,400*
1917年2月革命後	24,000	〃	24,000
1917年4月	100,000	〃	100,000
1917年8月	240,000	〃	240,000
1917年10月	350,000	〃	350,000
1918年3月	390,000	〃	390,000
1919年3月	350,000	〃	350,000
1920年3月	611,978	算定されていない	611,978
1921年3月	732,521	〃	732,521
1922年1月	410,430	117,924	528,354
1923年1月	381,400	117,700	499,100
1924年1月	350,000	122,000	472,000
1925年1月	440,365	361,439	801,804
1926年1月	639,652	440,162	1,079,814
1927年1月	786,288	426,217	1,212,505

КПСС в цифрах (末尾に「ソ連共産党中央委員会組織 = 党活動部 Отдел организационно-партийной работы ЦК КПСС」と記されている)。—《Коммунист》, 1967, No. 15, стр. 91 より作成。*これのみ ВСЭ, 1-ое изд., т. 11, М.-Л., 1930, столб. 531, таблица 1 から引用。

九三〇年刊)のブブノフの執筆項目「全連邦共産党(ボ)」の付録統計集のなかの党員数に関する表からとったものである。この表は党中央委員会統計部の計算に基づくものとされており、公式資料としてこれまで欧米の研究書のなかで頻繁に引用されてきたものであるが、そこに提示されている党員数は、前記『コムニスト』論文のそれとは異なるところも多々ある^③。

第2表は、ブブノフの統計集のなかの党の社会的構成に関する表と、ソ連の経済学者ストルミリンの『選集』第一巻収録の論文「一九二二年ごろのロシア共産党の構成」のなかの同様の表とを合成したものである。

ストルミリンのこの論文は、脚注によれば、一九二二年に実施された最初の全国的規模の党センサスの報告書の第四分冊^④(一九二三年刊)と同一物であるという^⑤。ストルミリンの表は一九二二年までしか扱っていない。しかし、それとブブノフの表とが重なる部分は、百分比の数字が完全に一致する(ただし、奇妙なことに、百分比の数字が完全に一致しているが絶対数が異なる箇所がある^⑥)。現代ソ連の文献も、当該時期の党の社会的構成に関しては、すべて第2表に示された数字を用いているのである^⑦。

さて、第2表における「労働者」、「農民」、「ホワイトカラー」の分類の基準は、「現在の職業」でもなく「社会的出身」即ち親の職業でもないことに注意する必要がある。革

第2表 ロシア共産党の社会的構成

	労働者 % 〔千人〕	農民 % 〔千人〕	ホワイトカラー・その他 % 〔千人〕	(ホワイトカラー + その他) % 〔千人〕
1905年はじめ	61.7 〔5.2〕	4.7 〔0.4〕	33.6 〔2.8〕	(27.2 + 6.4) 〔2.3〕〔0.5〕
1917年はじめ	60.2 〔14.2〕	7.6 〔1.8〕	32.2 〔7.6〕	(25.8 + 6.4) 〔6.1〕〔1.5〕
1918年はじめ	56.9 〔65.4〕	14.5 〔16.7〕	28.6 〔32.9〕	(22.4 + 6.2) 〔25.8〕〔7.1〕
1919年はじめ	47.8 〔120.1〕	21.8 〔54.9〕	30.4 〔76.5〕	(23.9 + 6.5) 〔60.1〕〔16.4〕
1920年はじめ	43.8 〔188.7〕	25.1 〔108.4〕	31.1 〔134.2〕	(24.3 + 6.8) 〔104.7〕〔29.5〕
1921年はじめ	41.0 〔240.0〕	28.2 〔165.3〕	30.8 〔180.3〕	(23.7 + 7.1) 〔138.8〕〔41.5〕
1922年はじめ(粛清未了)*	37.3* 〔215.3〕	32.1* 〔185.2〕	30.6* 〔176.2〕	(23.1* + 7.5*) 〔133.1〕〔43.1〕
1922年(粛清完了)	44.4 〔178.5〕	26.7 〔107.1〕	28.9 〔116.2〕	(22.2 + 6.7) 〔89.3〕〔26.9〕
1923年はじめ	44.9	25.7	29.4	
1924年はじめ	44.0	28.8	27.2	
1925年はじめ	56.7	26.5	16.8†	
1926年はじめ	56.8	22.9	20.3	
1927年はじめ	55.7	19.0	25.3	

BCЭ, 1-oe изд., т. 11, М.-Л., 1930, столб. 533, таблица 6; С. Г. Струмплянн. Избранные произведения в пяти томах, т. 1, М., 1963, стр. 279, таблица 66 より作成。〔 〕内の絶対数と「ホワイトカラー・その他」の内訳は Струмплянн による。* BCЭ の表には記載されていない。† BCЭ の表では17.8となっているが誤り。

命後、党や国家機関等の社会的構成を調査するさい一般に用いられた方法は、「社会的状態 социальное положение」による分類であった。これは、過去のある時期——一九二二年の党センサスでは一九一七年の革命までの時期、のちには各人の入党までの時期——の「基本的職業」によって定められた。革命後、階級間の流動が激しくなったために、このような方法が用いられたとされている。^⑩

第2表の「ホワイトカラー」というのは、原語では《служащие》(white-collar workers; employees)であって、「職員、事務職員」とも訳されるが、主として事務などの非肉体労働に従事する公務員、会社員、店員等の勤め人を指す。だが、この範疇には高級官僚から使丁 слугами に至るまでの、極めて多様な階層が含まれるのである。^⑪

「その他」というのは一九二二年の党センサスでは、ストルミリンによれば、「独立の手工業者と家内工業者 самостоятельные ремесленники и кустари」、「ごわゆる自由職業の者 лица так называемых свободных профессий」、「学生等を指す。自由職業の者についてはなんの説明もないが、文筆家や医師や弁護士を含むとすれば、ほかに「その他」に学生も含まれている以上、「ホワイトカラー」と「その他」とを明確に分けて考える必要はないように思われる。ブブノフの表では、両者は「ホワイトカラー・その他」として一つにまとめられている。^⑫

かなり厳密な党員調査がはじめて行なわれた一九二二年以前のこの種の数字に関しては、正確さを期待することは到底できない。それらは相当大幅な誤差を含んだ「近似」値であると考えた方がよい。革命とその直後の時期には、党中央は正確な党員数すら把握できなかった。また、調査された者が、自分の以前の基本的職業について正しい回答をしているという保証もなかった。他方、調査者自身、「社会的状態」と「現在の職業」とを混同していた例すらあるという。^⑬

しかし、第1表と第2表から、次のようなおおよその傾向を読みとることは可能であろう。まず第一に目につくのは、二月革命後党員数が文字通り飛躍的に増大していることである。ただし、一九一八年以降に一時減少期があり、さらに一九二一年以降に顕著な減少が認められる。一九二一年以降の減少は大量粛清のためであろう

が、そこに至るまでの過程で、党員数を減少させる何かが生じたのである。

次に社会的構成に関しては、革命後の四、五年間に、(1)労働者の占める割合は低下の一端を辿っており、(2)逆に農民の比重は増大しているが、(3)「ホワイトカラー・その他」もかなり大きな比率を保持し続けている。これを見る限り、「階級的に異質の分子」の比率が増大していた、と見なすことができよう。

① たごえは Андрухов, ПС, 1917-1937 гг. стр. 123.

② たごえは Fainsod, p. 249.

③ ププノフの統計集の表の数字を左に示しておく。ただし、一九二八〜三〇年の数字は省略。一九二二年以降の数字は党員候補を含む。

ロシア共産党の党員数

1905年はじめ	8,400
1907年はじめ	23,600
1917年4月	40,000
1917年8月	200,000
1918年はじめ	115,000
1919年はじめ	251,000
1919年3月	313,766
1920年はじめ	431,400
1920年3月	611,978
1921年はじめ	585,000
1921年3月	730,000
1922年はじめ	514,800
1923年はじめ	485,600
1924年はじめ	472,000
1925年はじめ	798,804
1926年はじめ	1,078,185
1927年はじめ	1,147,074

④ Всероссийская перепись членов РКП(б), 1922. вып. 4. М., 1923. 筆者未見。

⑤ См. С. Г. Струмилин. Избранные произведения в пяти томах. т. 1, М., 1963, стр. 229, прим. 1.

⑥ Пупновの表の一九二三年の百分比とストルミリンの表の一九二二年(爾清後)の百分比が完全に一致しているけれども、絶対数が異なる。

つづきのつづき。

⑦ たごえは В. И. Ленин и строительство...》 стр. 63. 3連の学者は皆、注④にあげた Всероссийская перепись... вып. 4を典拠としている。

⑧ Струмилин, стр. 251. 一九一七年の時点は二〇歳以下であって、しかも定職に就いていなかった者については、「現在の職業」が考慮に入れられた(там же)。

⑨ 一九二七年の党センサスでは、入党の時点までの「基本的職業」によって社会的状態が決められたという(『党内諺『ソビエト政治史』一〇七頁)。

⑩ 同右。五頁。Струмилин, стр. 251.

⑪ Там же. 「ホワイトカラー」の説明はない。「使丁 служителиを含む」とのただし書きがあるのみである。一九二七年の党センサスでの「職員〔ホワイトカラー〕」については、溪内謙『スターリン政治体制の成立』第一部、五二頁参照。

⑫ Струмилин, стр. 251.

⑬ ВСЭ, 1-ое изд., т. 11, М.-Л., 1930, столб. 533, таблица 6.

⑭ В. И. Ленин и строительство...》 стр. 149.

二 一〇月革命直後までのボリシェヴィキ党

二月革命以前のボリシェヴィキ党については、ストルミリンの表もブブノフの表も、一九〇五年はじめのデータだけしかあげていない。だがともかく、一九〇五年はじめの時点での黨員数八四〇〇という数字が「目分量で」^①ではあるが一九二二年までに算定されており、同時にそのときの党の社会的構成も、いかなる方法によったかは不明であるが、一応算定されていたのである。それによれば、一九〇五年はじめの党内の労働者の比率は非常に高い（第2表）。これを見る限りでは、ボリシェヴィキは、当時すぐれて労働者的な党派であったとの印象が得られるであろうが、実情はどうであったか。帝政時代の同党について若干考察しておきたい。

レーニンが彼の有名な党組織論を提起した今世紀初頭は、社会民主主義派のインテリゲンツィアの運動と労働者の運動とが、ようやく部分的に結合してまもない時期である。社会民主主義派のインテリの内部では、いわゆる「経済主義者」と『イスクラ』派とが対立していた。後者は、政治闘争への労働者の引き入れ、「手工業的」活動の清算、統一的党組織の建設等では合意していたが、「経済主義者」を圧倒したのち分裂する。その分裂の契機となったのが、レーニンの党組織論をめぐる論争であった。

『何をなすべきか』（一九〇二年刊）のなかで最も鮮明に表現されたレーニンの党組織論は、確固たる革命理論に導かれ、高度に組織化された少数精鋭の職業革命家からなる、中央集権的な革命政党の創出を要求していた。レーニンの考えでは、この党は、労働者大衆（およびその組織）との接触を保たなければならないが、しかしあくまで大衆（組織）の外に立って、これを指導し教導するべきであった。労働者は、単独では労働組合主義以上のものに到達することはできないとされた。革命的理論を創出することができるのは、インテリだけであった。^②

それでは、革命政党を構成する「職業革命家」も、もっぱら意識性の高いインテリから補給されるべきなのであるか。

第3表 ロシア社会民主労働党大会代議員の社会的構成

党大会	代議員の 数*	調査された 代議員の数*	社会的構成			
			労働者	農民	ホワイトカラ ー・その他	不明
I (1898年)	9**	—	—	—	—	—
II (1903年)	57	51(100%)	3(5.9%)	—	40(78.4%)	8(15.7%)
III*** (1905年)	38	30(100%)	1(3.3%)	—	28(93.4%)	1(3.3%)
IV (1906年)	159	145(100%)	36(24.8%)	1(0.7%†)	108(74.5%†)	—
V (1907年)	336	336(100%)	116(34.5%)	2(0.6%)	218(64.9%)	—

BCЭ, 1-oe изд., т. 11, М.-Л., 1930, столб. 539-540, таблица 17 より作成。*審議権だけの代議員をも含む。**ある研究者によれば、この9名のうち1名が労働者出身の者、あとの8名はインテリであった (J. L. H. Keep, *The Rise of Social Democracy in Russia*, London, 1963, p. 54)。***ボリシエヴィキだけの大会。†原表ではそれぞれ0.8%, 74.4%となっている。

「労働者の組織」と「革命家の組織」とが対置されているからには、レーニンのいう革命政党が、何よりもまず、幾世代にもわたって革命家を供給してきたインテリゲンツィアから構成員を選びとることは、ほとんど自明であった。

だが、レーニンは、労働者が革命政党に入ることを拒んでいるのではなく、「党活動の面で、インテリ革命家と同一の水準にある労働者革命家の育成に助力することが、我々の第一の、最も緊急の義務」(傍点はレーニン)であるとし、「労働者大衆が

このような職業革命家をますます多く『提出』する」ことを要望していたのである。

無論、労働者が革命政党に入る場合には、彼は労働者の組織から離れ、全生活を革命活動に捧げなければならない。そのときには、労働者とインテリのあいだの差異は消滅する。つまり、革命政党＝労働者階級の前衛党でまず問題になるのは、革

命活動遂行に関する党員の特別の資質と能力であって、彼の出身階級(層)ではないのである。『何をなすべきか』では、少数精鋭の革命政党の「社会的構成」の問

題には、第一義的な重要性は付与されていない。

革命家の組織と労働者の組織を峻別するレーニンの党組織論に対しメンシエヴィキが反論を展開するが、我々はこの論争には立ち入らず、社会民主主義派の実態に目を移そう。

一九〇三年ごろは、ボリシエヴィキもメンシエヴィキもともに小集団であり、両者を合わせても高々数千にしかならなかった。⑥党の基底部では労働者活動家も多く見られるけれども、指導者層では、ボリシエヴィキとメンシエヴィキとを問わず、

依然としてインテリが圧倒的優位を保持していた。それは党大会の代議員の構成にもよく現われている(第3表)。一九〇五年の第三回党大会までは、労働者代議員は極めて少数である。五八頁の第2表では一九〇五年のポリシエヴィキの六割が労働者となっているが、実際には、党の上層部に近づくにつれ労働者は減少し、地方委員会レベルでは、しばしば全く見当たらなかった。

しかし、第一次革命は右のような状況を根本的に変えた^⑦。大衆の力量を認識したレーニンは、大衆への門戸解放を強く主張するに至った。第三回党大会(ポリシエヴィキのみの大会)で彼が、当惑する代議員たちを前に、地方委員会での労働者の割合を八割にまで高めることを提案したことは有名である。もともと、レーニンが多数の労働者の登用を唱え始めたことは、それほど驚くべきことではなからう。『何をなすべきか』では、労働者革命家の育成が望まれていた。『一步前進二歩後退』(一九〇四年刊)では、メンシエヴィキ弾劾の文脈においてではあるが、インテリの個人主義、無気力、浮動性が徹底的に攻撃され、それに「プロレタリアートの規律と組織」が対置されている^⑧。

レーニンのこの提案は容れられなかったが、実際に、社会民主党の指導機関内での労働者の比重は飛躍的に増大している(第3表)。同時に党員数も急増した。一九〇五年のはじめにはポリシエヴィキは八四〇〇人にすぎなかったが、二年後には四万六〇〇〇人に達している^⑨。急激な成長と、革命がもたらした政治的自由の増大は、党の構造を柔軟なものに変えていった。ポリシエヴィキは、新しい形態の党、つまり大衆政党に転化しつつあった。

だが、第一次革命もやがて衰え、ポリシエヴィキとメンシエヴィキは、再度セクト組織へと退化していかねばならなかった。比較的堅固な組織をもつポリシエヴィキの崩壊の度合はメンシエヴィキのそれよりは小さかったが、それでも一九一〇年ごろには、ポリシエヴィキの総数は一万以下に縮小していた^⑩。

党組織から真先に離脱したのはインテリであったらしい。一九〇八年二月、レーニンは、インテリ逃亡の知らせが至るところから来ていることに触れ、党は「小市民的なクズを払い落して」おり、党内でのインテリ層の意義は低下している、

と述べている。⑩。その後の数年間、彼はインテリの大量離脱に幾度も言及している。⑪。その大量離脱がレーニンのインテリ不信を強めなかつたはずはない。

無論、他方でポリシェヴィキ党のトップクラスに、ジノヴィエフ、カーメネフら非常に多数のインテリ党員が包含されていたことも事実である。レーニンのインテリ攻撃は、一般的にいえば、実際のな革命活動に適合的でないインテリの負の諸特徴、即ち個人主義、日和見主義、無気力、空論好き等に対するものであった。⑫。党内にとどまり、彼の指導下に活動に没入しているインテリ活動家たちには、当然のことながら、彼の批判の矛先は向けられていない。レーニンの現実主義、実践主義は、やがて技術インテリ重視にも連結してゆくであろう。だが、それはまだ先のことである。

ポリシェヴィキ党はこの反動期に、ツァーリズムおよび他党派との闘争、内部の分派の排除を通じて、中央集権的な、一枚岩の組織体へと凝集していった。ポリシェヴィキは、一九〇二年ごろレーニンが構想していた「党」を現実化しつつあった。⑬。一〇月革命後、膨張した党の中核を形成したのは、党内外の熾烈な闘争や困難な生活のなかで自然淘汰されずに組織にとどまった、筋金入りの党員たちであった。

一九一七年二月に突発した革命は、左翼の運動を締めつけていたツァーリズムの堅い棒を砕いた。あらたに合法化された諸政党には新人が大量に流れ込んだ。ポリシェヴィキ党もまた一九一七年を通じて爆発的に膨張し、第一次革命期と同様に、否、それ以上に大衆政党化したのである。この膨張の規模を正確に把握することは、誰にもできはしまい。革命の渦中では、党中央と各地に簇生した地方組織との情報交換は円滑には行なわれなかつたようである。また、地方組織のほかも正確な構成員数を把握する余裕をもたなかつたであろう。メンシェヴィキとの明確な分離がなされていない地方組織も多かつた。⑭。

四月の時点での党員総数については、大幅に食い違う幾つかの概算がある。四月協議会での報告によれば、その数は七万九〇〇〇であるが、⑮。ストルミリンの表では四万六〇〇〇、ブブノフの表では四万となっている。現代ソ連の歴史家は、

第4表 1917年における都市のボリシェヴィキ党組織の成長

都市の党組織	二月革命のころの構成員	四月協議会のころの構成員	第6回党大会(7~8月)のころの構成員
ベトログラード市党組織	2,000	16,000	36,000
モスクワ	600	7,000	15,000
エカテリノスラフ	400	1,500	3,500
キエフ	200	1,900	4,000
ルガンスク	100	1,500	2,596
サラトフ	40	1,600	3,000
エカテリンブルグ	40	1,700	2,800

V. V. Аникеев. Сведения о большевистских организациях с марта по декабрь 1917 года. —《Вопросы истории КПСС》, 1958, No. 2, стр. 131; Его же. Некоторые вопросы партийного строительства в период подготовки к Октябрю. —《Коммунист》, 1967, No. 6, стр. 29 から作成。

約一〇万という数字をはじき出している（五七頁第一表）。一〇月の時点での党員数の概算も、ブノフの一五〇〇〇からスヴェルドロフの四〇万までの開きがある。しかし、いずれの数値をとるにせよ、二月革命後のボリシェヴィキ党の急激な膨張という事実は揺るがない。特に、若干の都市の党組織は、瞠目すべき成長率を示している（第4表）。

次に、党の社会的構成に目を移すと、労働者は、一九一七年はじめの六〇・二%から翌年はじめの五六・九%へとわずかに減ってはいるが、ともかく過半数を堅持しており（第2表）、この時期のボリシェヴィキ党がプロレタリアの性格を濃厚に帯びていたということが、推測されるであろう。農民の比率は一年間に倍増している。一九一七年における全党員数の急増を勘考するならば、極めて多数の農民が入党したことがわかる。だが、彼らのうちの多くの者が軍服を着ていたに違いない。ボリシェヴィキ党は農村では伸び悩んだけれども、一〇月までに多数の兵士（その圧倒的多数は農民出身者）の獲得に成功した。軍隊内の党員の数は、八月の第六回党大会のころには二万六〇〇〇程度であったが、コルネーロフ事件後激増し、一〇月はじめには西部戦線だけで四万九〇〇〇に達していた^④。

「ホワイトカラー・その他」は、一九一七年中、全体に占める割合では微減しているものの、絶対数では大いに増大している。ところがこの時期、またも党からのインテリの離脱が第六回党大会で指摘されている。

この大会でのアンケート調査では、地方の党組織の組織活動についての質問に

対し、活動しているのは地方の労働者であり、インテリはいないと回答が多かった。ヴォルガ流域地方やカフカースの代表の報告もインテリの離脱や非協力に触れており、さらに大会決議の一つも、インテリの離脱は「一九〇五年に始まる」が「二月革命以後大規模なものになった」と述べている。

インテリが大量に脱党したとすれば、一九一七年における「ホワイトカラー・その他」の絶対数の内容は、インテリ以外の者の増大ということになる。しかし、インテリの脱走については、筆者は第六回党大会での証言しか知らず、その後のインテリの動向、増大したホワイトカラー党員の内訳等はつかめていない。一般に中間層の動向などは、ソ連ではあまり研究のなされない分野に属するが、数少ない研究の一つであるヴォストロコフの論文によれば、一九一七年一〇月までに、郵便電信・鉄道関係の職員、商工業ホワイトカラー、学生、教職員などといった職種の人々がポリシェヴィキを支持し、入党したという。ちなみに、ポリシェヴィキが技術インテリに大々的に提携を呼びかけるのは一九一八年はじめてあるが、同年末までに多数の技術インテリがソビエト政権に協力するようになったといわれている。

ここで、次のような問題が当然検討されなければならない。——少数精鋭の革命政党を理想としていたポリシェヴィキ党は、二月革命後の自分の隊列の爆発的膨張にどう対応したのか。

リグビーはこう書いている。党指導部が二月革命後の党の急激な膨張について討議し決定したという記録はないが、(1) 地下活動の諸条件に合うように企画された、過去の高度に選択的な党員採用策が、いまやその妥当性を失ったということ、(2) 他の諸党と鋭く競合している自党の影響力を拡大しようとする衝動が新党員の大量採用を必然化するということ、は自明のことと見なされていたようである。

確かに、レーニンや他の指導者たちが党員の急増を深く憂慮し、膨れあがった党を元の少数革命家集団に戻そうと努めたという形跡はない。指導部は、党の大衆政党化傾向を、リグビーの指摘するような理由で黙認していたように見える。しかし、指導部がこの党の膨張に何の危惧も感じなかったかといえば、そうではない。党員の質を精査しようとする伝統

は簡単には消えず、党員の激増に直面して一層強まるのである。それは、党員の採用規定の改正に現われているように思われる。

第六回党大会までの党規約は、一九〇六年の第四回党大会で採択された規約（のち一部改正）であったが、そこには「党綱領を受け入れ *принимать*、物質的手段によって党を支持し、いずれかの党組織に入る者は、党員として採用される」との条項があった。このような党員採用規定は、二月革命後、一段と厳しいものにされるのである。ソ連の研究によれば、三月一八日、党中央委員会ビューローは党員資格の問題を審議し、「党綱領を承認し *принять*、組織に入る者」が、「二名の党員の推薦」によって、党員として採用されるという決定を下している。この決定は直ちに地方の組織に通知されたという。^②

アニキエーエフは、第六回党大会で新規約が採択されるまで党組織はこの原則に導かれていたのであり、この点でポリシェヴィキは、何の検査もせずに新人が自党に入るに任せたメンシェヴィキやエスエルと異なり、機会主義者や階級的異分子の入党を阻むことに努めたのだ、と論じているが、^③ともかく、量より質を重視する伝統は、二月革命後も保持されていたといえよう。

続いて第六回党大会で採択された新規約には「党綱領を承認し、党組織の一つに入り、党のあらゆる決定に従い、党費を納める者」が「二人の党員の推薦」と当該組織の「次の総会の承認」を経て、党員として採用されるということが明記されている。条件は一段と厳しくされているのである。ただし、党員の出身階級（層）についての制限は、ここでは全くないことに注目しておきたい。階級的異分子の問題は、まだ扱われてはいないのである。

さて、右のような厳しい入党の条項が定められたことは明白な事実であるけれども、たとえば半年で一組織の構成員が四〇人から三〇〇〇人に膨張するような時期に（第4表）、そのような条項が、実際に、どこまで遵守されていたかは、疑問である。

ソ連の一研究者はこう述べている。一九一七—一八年における「党の隊列の急激な成長は、多くの場合、個人的選別の方法によってではなく、しばしば推薦および候補資格の審議なしの集団的方法によって行な」われ、勤労者の集会は、「しばしば、それに出席した者全員の入党登録によって仕上げられた」と。そうだとすれば、とりわけ、ポリシェヴィキ党が権力の座について一九一七年一〇月以後、大量の「不良分子」や「異分子」が党内に入ってきたとしても不思議ではない。

だが、次々に生じる緊急の諸問題に没頭していたレーニンやほかの幹部たちは、この時期、党員資格等の問題に特別な注意を向けることがなかった。問題はまた表面化していなかったのである。

- ① Стручанин, стр. 274.
- ② Ст. В. И. Ленин. Полное собрание сочинений (以下 Ленин. ПСС. と略), т. 6, стр. 31. 『レーニン全集』(第四版の邦訳) 大月書店(以下『全集』と略) 第五卷、三九五—三九六頁。ただし、以下の引用に於いて我流に直したところがある。
- ③ Там же, стр. 131. 同右、五〇六頁。レーニンは、党活動の面以外の面は労働者が同一の水準に達するとうことは、たとえ必要ではあつても、これほど容易くも緊急にせむらうと述べている(там же, 同右)。
- ④ Там же, стр. 110. 同右、四八三頁。
- ⑤ Там же, стр. 112. 同右、四八六頁。
- ⑥ Lane, p. 12.
- ⑦ Liebman, pp. 45-49.
- ⑧ Третий съезд РСДРП, М., 1959, стр. 262; Ленин. ПСС, т. 10, стр. 163. 『全集』第八卷、四二二頁; S. M. Schwartz, *The Russian Revolution of 1905*, Chicago and London, 1967, pp. 216-220.
- ⑨ Ленин. ПСС, т. 8, стр. 254, 354, 376. 『全集』第七卷、二七七—二九一、四一七頁。
- ⑩ J. L. H. Keep, *The Rise of Social Democracy in Russia*, London, 1963, p. 288.
- ⑪ Liebman, p. 148.
- ⑫ Ленин. ПСС, т. 47, стр. 133. 『全集』第三四卷、四三三頁。
- ⑬ 下同、см. там же, т. 19, стр. 409. 同右、第一六卷、二八九頁。
- ⑭ Liebman, p. 102.
- ⑮ *Ibid.*, p. 55.
- ⑯ В. В. Анисеев, Сведения о большевистских организациях с марта по декабрь 1917 года.——Вопросы истории КПСС, 1958, No. 2, стр. 127; Его же. Некоторые вопросы партийного строительства в период подготовки к Октябрю.——«Коммунист», No. 6, Апрель 1967, стр. 27.
- ⑰ Сельман (апрельская) верхово́йская и Петроградская общероссийская конференция РСДРП(б), М., 1958, стр. 149.

- ⑳ *The Bolsheviks and the October Revolution: Minutes of the Central Committee of the Russian Social-Democratic Labour Party (Bolsheviks), August 1917 - February 1918*, London, 1972, p. 97.
- ㉑ Анисеев Сидеяни... стр. 132.
- ㉒ Шестой съезд РСДРП(б), М., 1958, стр. 319-390.
- ㉓ Там же, стр. 89, 93.
- ㉔ Там же, стр. 268; Коммунистическая партия Советского союза в резолюциях и решениях съездов, конференций и пленумов ЦК (1917-1970) в резолюциях... (註), т. 1, М., 1970, стр. 499.
- ㉕ Н. И. Востриков. О политике и тактике партии большевиков по отношению к непролетарским слоям трудящихся города. — «Ленинская партия—организатор Октябрьской революции», М., 1965, стр. 162, 183-185.
- ㉖ К. Е. Вайлес, *Technology and Society under Lenin and Stalin*, Princeton, New Jersey, 1978, pp. 44-45; W. П. Ким編「中西治訳『ソ連の科学技術』東京創元社」一九七二年 三〇頁。
- ㉗ Рыбзу, р. 59.
- ㉘ КПСС в резолюциях... т. 1, стр. 182.
- ㉙ О. Г. Обныкин. Устав большевистской партии в период подготовки Великой Октябрьской социалистической революции. — «Вестник Московского университета», 1967, No. 6, стр. 8; Ю. Г. Туршиев. История устава КПСС, М., 1971, стр. 79; Анисеев. Некоторые вопросы... стр. 29.
- ㉚ Там же.
- ㉛ КПСС в резолюциях... т. 1, стр. 496.
- ㉜ «В. И. Ленин и строительство...» стр. 64.

三 第八回党大会と党の社会的構成改善策

一〇月革命後、ボリシェヴィキ党には新人が流入し続けた。党員総数は、一九一七年一〇月から翌年三月まで、四万ほど増加している（第1表）。スヴェルドロフは、一九一八年三月の第七回党大会の中央委員会組織報告のなかで、多くの党細胞が急速に膨らみ、多くの新しい組織が形成され強化された、と述べた^①。だが、それらの地方組織は、往々にして自主的に形成されたものであり、党中央や地方委員会の指導に唯々諾々とは従わない場合が多かったという^②。

一〇月革命後、党指導部が党の秩序と規律の問題に大きな注意を向けたのは、一九一八年五月になってからであった。すでに三月にはブレスト—リトフスク条約は締結されており、他方で全面的な国内戦は、まだ始まっていなかった。この「息つき」期に、党中央はようやく党組織全体を点検する余裕を得、ブレスト講和をめぐる大論争で一層弛緩した組織の

籠を締め直そうとした。

五月一日の党中央委員会の会合で採択された一決議^③は、責任ある党活動家集団がソビエト活動に吸収されてしまい、他方で広範な大衆が入党した結果、党の秩序と規律が甚だしく侵害されていることを強調し、いかなる活動に従事している黨員も皆、党建設に大きな注意を向け、党の決定を遂行し、報告書を提出するよう要求した^④。さしあたり、黨員の教育と政治的訓練、党組織内の積極的活動への全党員の引き入れに重点がおかれていた。しかし、同時に、中央委員会は、とりいり分子を追い払い、入党を制限する必要をも指摘したのである^⑤。

中央委員会の呼びかけに答えて、党諸組織は、党の隊列の清掃のための活動を展開した。最も有効な手段の一つは、黨員の「再登録 *переперепись*」であった。これは、中央委員会の決議以前に、ペトログラド組織などで実施されていたものであるが、五月以後、多くの組織で採用されている。再登録にさいしては、党内残留を望む者は皆、再申請を義務づけられ、厳しい審査を受けた。前年の第六回党大会で採択された党規約の入党条項も、比較的厳しく適用されるようになった^⑥。

さらに、入党希望者に直ちに黨員の資格を授与するのではなく、一定期間、彼らを準黨員や臨時黨員の地位にとどめておく方法も、各地方組織で様々に試みられた^⑦。それらの試みは、結局、一九一九年末の第八回党協議会による黨員候補の統一規定の承認へと収斂することになる。第八回党協議会は、次のような条項を党規約に挿入することを決定している。

——入党希望者は、党の綱領・戦術の習得および個人的性質の検査を目的とする候補期間 *кандидатский срок* を経る（第五條）、彼は黨員歴六カ月以上の二名の黨員の推薦を受け、地方委員会によるその推薦の検査を経て、候補となる（第六條）、労働者と農民は二カ月以上、その他の者は六カ月以上候補にとどまる（第七條）、等である^⑧。候補期間ばかりでなく、実に様々の制限的条件を伴うこの候補の制度は、その効力を発揮したらしく、細部は変更を加えられながらも、今日まで存続しているのである。

ところで、右の規定のうち、特に注目を要するのは第七条であつて、そこでは、労働者と農民に一定の優先権が与えられている。しかし、労働者と農民の優先的採用策は、ここではじめて登場して来るものではない。それは、一九一九年三月に開かれた第八回党大会で提起され決定されたのである。そこではどんな論議がなされたのか、この点を見てゆこう。

共産党の黨員数は、一九一八年三月の三九万から翌年三月、第八回党大会開催の時点での三五万へと、四万も減少している(第1表)。前述の様々な制限的諸措置が、その減少の理由の一つとなったことは疑いない。量より質を重視する党の目的は達成されたかに見える。しかし、国内戦のさなかに開かれた第八回党大会は、党内の腐敗分子の一掃と党の社会的構成の改善の問題にとりくまなければならなかつたのである。

第八回党大会は、まず新しい党綱領を採択し、発足したばかりのコミンテルンについて討議したが、さらに、当時党が直面していた三つの重要問題、即ち軍事、組織、農業問題を、それぞれ部会を設けて審議した。そして、とりわけ組織部会と農業部会で、党と労働者・農民大衆とのあいだに、大きな亀裂が生じていることが、確認されなければならなかつたのである。

組織部会では、大会直前に急逝したスヴェルドロフにかわり、ジノヴィエフが党中央委員会を代表して主報告者となり、他方、党内反対派「左翼共産主義者」の一員であつたオシンスキーが副報告者となつた。だが、党の大衆からの遊離の傾向に関する認識では、出席者のほとんどが一致していた。「大衆からの遊離」、そしてその対語としての「大衆との結びつきの必要」という言葉は、この部会で幾度発されたことだろう。

この部会では、党の大衆からの遊離を引き起こしているものとして、党の官僚制化傾向が注目された。党はいまやプロレタリアの性格を喪失しつつある、との指摘がたびたびなされた。ソスノフスキーは次のように発言している。——モスクワ組織などでは、一〇月革命のときにくらべて黨員数は減少している。もし増大しているとすれば、それは労働者以外の階層がふえたためである。「我々は中央から、過剰の労働者が党に入らないように配慮すべしとの指令を受けとつてい

る。労働者は党に入れられず、他方で、ソビエトの官僚やタイピスト嬢たちは皆、入党を許されているのである。」^⑪

これらの「ソビエトの官僚」に、以前のインテリ層や官吏層の出身者が多数混入していたことは疑いない。ソビエト機構はポリシェヴィキの、名のある活動家の大多数を、党活動の一次的弱体化を招くほどに吸いとってしまったが、^⑫ 巨大な国家機構を運営していくには、行政的、事務的な知識や技能をもった多数の職員が必要であった。だが、そのような知識や技能をもった労働者は、当面ごく少数にすぎなかった。このため、レーニンが別の会議で指摘しているように、一度追い散らされた旧官僚層が再び国家諸機関に引き入れられ、しかも、彼らは「立身出世の方便として、ロシア共産党の黨員証を手に入れ始め」ていた。^⑬ 党の側としては、彼らを直接の統制下におくために、それを承認していたようである。^⑭

党指導部の代表であるジノヴィエフも、地方組織の「変質」について次のように述べている。個々の地域で党組織の指導者になっているのは、「労働者ではなく、ソビエトの官吏、ソビエトと党の官僚たる勤務インテリゲンティア層」であり、彼らはしばしば、党委員会議長、ソビエト議長、チエカ議長等の要職を一どきに兼任している。^⑮

本稿五八頁の第2表によれば、一九一八年ははじめからの一年間に、労働者黨員の比率は約九%も減っている。他方、農民黨員の比率は幾分ふえている。「ホワイトカラー・その他」の比率は微増しているにすぎない。しかし、その絶対数の伸び率は労働者黨員のそれよりはるかに大きい。農民やホワイトカラーの増大は、ポリシェヴィキ党が政権を掌握して全国家的活動に関与し始めたこと、しかも、最初提携していた左翼エスエルを含む他の諸政党が、すべて公然たる政治舞台から姿を消しつづつあったことと無関係ではあるまい。

さらに、共産党にとって悲劇的だったのは、労働者階級が、当面、有能な行政官や事務員を多数国家に供給できなかったばかりでなく、階級それ自体が崩壊に瀕していたことであった。ソビエト・ロシアの工業生産は、原料の杜絶、燃料の不足、運輸の停滞等のために、奈落へと転落しつづつあった。工場の操業停止や飢餓のために、労働者階級は離散し始めた。一九一九年の工業労働者の総数は、二年前の半分にまで減少していた（第5表）。

第5表 センサスの対象となった工業の労働者数

年	平均数 (千人)	年間の減少		1917年に対する百分比 (%)
		(千人)	(%)	
1917	2596.4	—	—	100.0
1918	2011.1	585.3	22.5	77.5
1919	1334.5	676.6	33.6	51.4
1920	1222.8	111.7	8.4	47.1
1921	1185.5	37.4	3.1	45.6
1922	1096.2	89.2	7.5	42.2

Изменения в численности и составе советского рабочего класса. М., 1961, стр. 9.

無論、労働者党員の絶対数は年ごとにふえ続けている。しかし、党内では労働者党員以上に他の階層の出身者が増大していたのである。その上、多くの労働者党員が抜擢され、国家や党の機構の重要ポストに吸収されていた。サプロノフやムゲラーゼら元の左翼共産主義者は、ここにも危険を見た。それらの労働者党員は官僚となり、旧官僚層がもち込んだ悪習にも染まり、いまや労働者大衆から遊離しているというのである^⑮。

国内人口の圧倒的多数を占める農民と党機関との関係にも、特に大きな注意が向けられている。平行して開かれていた農業部会^⑯では、従来の政策が修正され、「中農との同盟」への方向転換が行なわれたのであるが、組織部会でも、地方の党員や官僚の横暴な行為が多くの農民の「深い憎悪」を引き起こし、党と農民との関係を極度に悪化させている、という指摘が再三再四なされるとともに、農村での党組織建設や宣伝扇動活動の一層の強化が、強く要望されている^⑰。

大きな権限を与えられた党員や官僚の無法行為については、多くの発言者が言及している。ノギンは、中央であれ地方であれ、多数の党活動家が、酒浸り、乱痴気騒ぎ、収賄、強奪等の「身の毛のよだつ」悪行を働いていると述べ、彼らを党から追い出すことを要求した^⑱。

また、党員資格が個人的利益や地位獲得に利用されているとの指摘もなされた。ジノヴィエフは、党員証が五〇〇〜一〇〇〇ルーブリという値段で売買されている例や、夜八時に地区委員会に現われ、「明日、職を探していくので、今日中に党員証がほしい」といったという男の例をあげている^⑲。

組織部会の討議ののち、部会から委任されて、ジノヴィエフが中心になり数名の委員とともに作成した「組織問題について」の決議はいう。——ロシア共産党は権力の座にあり、それゆえ優良な分子と並んで「十分に共産主義的ではない、それどころか全くのとりいり分子」、出世主義分子が「大波となつて」党内に流入していると。このままでは、党は大衆から完全に遊離してしまうに相違なかった。従来の入党制限策の手直しだけでは充分ではなく、「大規模な肅清、*сербешан*」が必要であった。さっそく五月に全国的再登録を実施すること、そのさい、党が権力を掌握したのちに入党した者に特別の注意が向けられることが決定された。

しかし、ただ単に腐敗分子を除去し、健全分子、できれば健全な労働者分子を党内に残すだけでは、問題は片付かなかった。もう一つの焦眉の課題があつたのである。とりわけ鉄道、食糧、軍隊等の分野で増大しつつあつた国家的活動に必要な要員を、共産党から大量に補給しなければならなかつた。これはジノヴィエフが強調した点であり、決議のなかでも党の現時点での「最も重要な課題の一つ」であると思なされてきた。国家活動に必要な人材を供給し、さらに現在国家活動に配置されているが「官僚主義に感染し、大衆から遊離している」多くの黨員を浄化し、党外大衆の信頼を回復するためには、解決策は「都市と農村の健全なプロレタリア分子」の大量採用しかなかつた。決議は「労働者、婦人労働者、青年農民」に「党の門戸を広く開放する」ことを宣言した。

他方、「労働者と農民以外の分子の入党は、厳しい選択のもとで行なわれるべき」であつた。そして、党は、「その社会的構成に生じる変化」を注意深く見守ることを義務づけられた。各党組織は、自己の社会的構成を正確に把握し、それを定期的に報告することを要求された。

ここで、ちょっと注目したいのは、決議のなかでの農民への言及である。決議は、ある箇所では「農村のプロレタリア分子」、ある箇所では「青年農民」、またある箇所では「農民」を積極的に採用すべき者としてあげている。筆者は、この乱れが、この時点での、農民に対する党の微妙な立場を暗示しているように思う。純然たる農村プロレタリアが労働者と

ともに積極的採用の対象とされることは当然であろうが、中農との同盟への政策転換が要求されている状況のもとで、「農民」という語には、中農への考慮が含まれていたのではなからうか。

ともあれ、このようにして腐敗分子の排除および労働者・農民（特に農村プロレタリアないし青年農民）の積極的採用という方針が定められたが、決議はこれにとどまらず、さらに、現在大衆から遊離している多数の党員を再度大衆に近づける具体策をも提示している。決議は、「大衆との結びつき」という項目のなかで次のことを定めている。「コムニストとソビエトのメンバーは、二週間に一度、自分の選挙人に報告することを義務づけられなければならない。連続三カ月以上純然たるソビエト活動に従事した労働者は、少くとも一カ月間、工場に呼び戻されなければならない。」^③

選挙人や元の職場との結びつきの維持を指示した、この規定については、実のところ、組織部会では全く論議がなされていないのである。組織部会後、ジノヴィエフが決議を作成したさいに、この規定が挿入されたであろうが、その元々の出所はどこであろうか。筆者はそれを明らかにしえない。しかし、ともかく党大会で、主流派のジノヴィエフらの手でこのような規定が決議に入れられているところが興味深い。党大会の総会で決議のこの部分を読みあげるにあたって、ジノヴィエフは、労働者の代表の最良の者でも、半年も工場にいかなければ一定程度大衆から遊離してしまう、と述べている。^④ 同様の見解は組織部会でムゲラーゼらがすでに表明していたが、その危険への対策として、このような規定が、党の決議に含められたということは注目し値する。

しかし、この規定が、現実にとこまで実施されたかは明らかではないのである。ソ連の研究書は、管見の限りでは、この規定に一切触れていない。この規定は、同じく第八回党大会によって採択された新党綱領の経済部門の第五項、即ち労働組合に国民経済の管理を委ねた条項^⑤と同様に、国内戦下の当時の困難な状況のなかでは、恐らく共産党の高い目標を示すだけのものに終わってしまったのではなからうか。もしかすると——これは全く筆者の推測にすぎないが——第八回党大会の直後、一労働者が始めた「共産主義土曜労働」、即ち自発的な時間外無給集団労働への参加が、定期的職場復帰の代

替物となったかもしれない。レーニンが絶賛したこの「共産主義土曜労働」は一九二〇年に最高潮に達するが、党員はこれに参加することを義務づけられた。不参加は、党員再登録のさい、除名の理由にもなったのである。^⑤

第八回党大会は、はじめて入党条件に、労働者と農民（もしくは青年農民）とそれ以外の者との区別をもちこむことを決定した。ジノヴィエフのような党の最高幹部が自らそのような決定を行なっているという事実は、すでにこの時点で、党と大衆との関係が、あるべき形から相当にずれてきているという意識が、指導部内でも高まりつつあったということを示している。

このときまでにレーニンは、彼が『国家と革命』のなかで表明したような国家行政や工業管理についての楽観的な見地から離れており、「知識、技術、経験の、いろいろな部門の専門家による指導がなくては、社会主義に移ることはできない」といい切り、ソビエト機構に「ブルジョア専門家」を高給をもって迎え入れていた。一九一八年末には、以前の雇業者や技術者が、重要な工業管理機関の人的構成において多数を占め、政策を指導していることが判明した。^⑥ソビエト機構の多くの部局でも、帝政時代からの官吏や技師が働いていた。赤軍でもまた、一九一八年末までに、二万人以上の以前の将校が指揮官として勤務していた。^⑦

労働者出身の各分野の専門家が充分養成されていなかった以上、ソビエト国家が外敵の攻撃に耐えて生き残るためには、これらブルジョア専門家への依拠は不可避であったろう。しかし、先に見たように、旧官僚層は、大衆との遊離をもたらす官僚主義をソビエト国家にもちこんでいるとも見なされていた。また、これら専門家のなかには国家の基本方針に同意できない人々も多数いたし、軍事専門家のなかには白衛軍に寝返る者も現われた。加うるに、これら専門家の利用は、一〇月革命の理念や従来の党の教義に背馳しており、一部の労働者や党員の憤激を喚起せずにはいなかった。当初の革命原理とソビエト政府の政策との合一を希求する彼らの声は、すでに左翼共産主義者の要求に反映していたが、やがて民主主義的中央集権派や労働者反対派の主張に結集することになる。

第6表 ロシア共産党大会代議員の社会的構成

党大会	代議員の教 [*]	調査された代議員の教 ^{**}	社会的構成			
			労働者	農民	ホワイトカラー・その他	不明
Ⅵ(1917年)	264	171(100%)	70(40.9%)	—	101(59.1%)	—
Ⅶ(1918年)	69	30(100%)	4(13.3%)	—	26(86.7%)	—
Ⅷ(1919年)	403	305(100%)	108(35.4%)	—	197(64.6%)	—
Ⅹ(1920年)	716	530(100%)	270(51.0%)	24(4.5%)	236(44.5%)	—
Ⅺ(1921年)	938	690(100%)	257(37.3%)	21(3.0%)	396(57.4%)	16(2.3%)
Ⅻ(1922年)	687	522(100%)	250(47.9%)	37(7.1%)	235(45.0%)	—

БСЭ, 1-ое изд., т. 11, М.-Л., 1930, столб. 539-540, таблица 17 より作成。*審議権だけの代議員をも含む。**第9回大会以降は議決権を有する代議員のみ。

同時に政府と農民とのあいだの亀裂も深まっていた。いったん土地を獲得してしまうと、農民はもはや都市における革命の成りゆきには、ほとんど関心をもたなかった。一九一八年四〜五月に、都市の食糧事情は危機的状況を迎えた。工業の崩壊のため都市と農村との商品交換関係は潰え、穀物が都市に搬入されなくなった。五月以降、政府は食糧独裁を宣言し、食糧徴発部隊を農村に派遣し、さらに、短期間ながら、農村での階級闘争の拠点たるべき貧農委員会を設置した。翌年一月には食糧割当徴発が開始された。しかし、土地革命によって著しく中農化していた農民は、多くの場合一体となって政府の農業・食糧政策に抵抗し続け、一部では一揆まで起こしたのである。^⑧

第八回党大会では、農民——とりわけ、富農に加えられるはずの攻撃をしばしば蒙った中農——が政府や党に対して強い不満をいだいていることが確認され、党は、割当徴発は続行しながらも、「中農との同盟」を宣言しなければならなかったのである。^⑨

このように、第八回党大会までには、政府・党と、本来それを支えているはずの労働者農民大衆とのあいだの懸隔が拡大しつつあり、党もそれに気づいていた。筆者には、大衆からの遊離への危惧が、国内戦さなかのこの時期非常に高まり、それが党組織の面で、一方で国家活動の要員確保の問題、他方で官僚制打破の問題と密接にからみあいながら、労働者と農民の優先的採用の決定を引き出したもののように思われる。党内の腐敗分子の一掃、党の社会的構成の改善の決定のねらいは、党と政府の諸政策に反発し、離反の兆しを見せた労働者と農民を再度自分の側に引き寄せることであっ

第7表 党中央委員（1917—1922）の出身と経歴

中央委員*	当選回数	親の職業・階層	学歴**・職歴
В. И. レーニン	7	視学官	カザン大学
И. В. スターリン	7	製靴工	チフリス神学校
Г. И. ジノヴィエフ	7	中産階級下層	ベルン大学
Ф. А. ジェルジンスキー	6	小貴族	中学校
Л. Д. トロツキー	6	農場経営者	オデッサ大学
Л. Б. カーメネフ	6	技師	モスクワ大学
Н. И. ブハーリン	6	教師	モスクワ大学・ウィーン大学
Х. Г. ラコフスキー	4	地主	ソフィア大学?
М. И. カリーニン	4	農民	労働者
М. П. トムスキー	4	労働者	労働者
А. И. リュコフ	4	農民	カザン大学
Ф. А. アルチョーム	4	農民	モスクワ工専
Н. Н. クレスチンスキー	4	教師	ペテルブルグ大学
К. Б. ラデック	4	郵便局員	若年より活動家
И. Т. スミルガ	4	農民	若年より活動家
В. П. ミリュエチン	3	教師	文筆家・経済学者
Я. Э. ルズターク	3	農業労働者	労働者
Г. Я. ソコロニコフ	3	医師	上級教育
Е. Д. スタソフ	2	法律家	労働者のための日曜学校教師
М. К. ムラノフ	2	農民	金属労働者
Г. И. ベトロフスキー	2	仕立屋	労働者
Е. М. ヤロスラフスキー	2	流刑移住農民	労働者
В. П. ノギン	2	商人	染物工
К. Е. ウォロシエロフ	2	労働者	労働者
Я. М. スヴェルドロフ	2	製版職人	薬剤師見習
М. В. フルンゼ	2	看護長(父), 農民(母)	ペテルブルグ工専
Г. К. オルジョニキーゼ	2	貴族	チフリス看護手学校
В. М. モロトフ	2	商人	ペテルブルグ工専
Л. П. セレブリャコフ	2	?	金属労働者
А. А. アンドレーエフ	2	農民	労働者

BCЭ, 2-ое изд., 3-ое изд.; Советская историческая энциклопедия. М., 1961-1976; *Who was Who in the USSR*, Metuchen, 1972 等より作成。* 当選回数が多い順, ついで年齢順に配列。
**中退を含む。

た。無論、他方で、党は、労働者に不人気なブルジョア専門家の利用、農民の怨嗟的である食糧割当徴発を撤廃するつもりはなかった。しかも、党機構の中央集権化は一段と強化され、選挙制にかわる任命制の拡大が、あらたな軋轢を呼び起こしつつあったのである。^⑩

ここで、やや脇道にそれて、党の上層部分の社会的構成を概観しておきたい。第6表は、第六〇一回大会に参加した代議員の社会的構成を示したものである。中農に一定の接近を試みた第八回大会以後に農民代議員がちらほら出てくるのは興味深いが、第八回大会までは、労働者と「ホワイトカラー・その他」しかない。両者の比率には変動がある。第六回大会には労働者党員が多数参加しているものの、次の第七回臨時党大会では、出席した少数数の代議員の大多数は「ホワイトカラー・その他」に属している。これら少数数の代議員が、党の最上層部の人々であろうことは、彼らのうちで一九〇五年までに入党した者の比率が七〇%と異常に高いことから推測できる。^⑪

次に第7表に移ろう。これは、一九一七年から二二年までに党中央委員に選出された人々の出身と経歴を示したものである。当選回数が多い人々、即ち党の頂点に位置する人々は、ほとんどインテリであるといつてよからう。しかし、党内で彼らの出自がとりたてて問題になることはなかったようである。彼らこそは党を創建し、指導し続けてきた人々であつて、一般のホワイトカラーやインテリと同列に論じられることはなかった。だが、第八回大会では、オシンスキー（彼自身はインテリ）は、この中央委員をも「労働者化する opakovs」ことを、つまり中央委員を増員して労働者出身の中央委員をふやすことを提案している。結局、中央委員の増員のみが決定されたのだが、オシンスキーのこの提案は、晩年のレーニンがいわゆる遺書（「大会への手紙」）のなかで行なつた、中央委員会の拡大とその労働者化の提案を（その有効性の評価は別として）我々に思い起こさせる。

第八回大会で定められた全国的な党員再登録は、一九一九年なかごろに実施され、事実上、党の、革命後の最初の主要な粛清となつた。「非共産主義分子を、主として党の支配的地位のゆえに入党し、党員の称号を自分の個人的な利益の

ために利用している人々を、党から一掃する^⑭」というのが、この再登録の目的であった。

地方委員会は、次のような党員に新しい党員証を交付しないよう指示された。(1) コムニストにふさわしくない行為(酒浸り、個人的利益のために党員の称号を利用すること等)をした者、(2) 赤軍脱走兵、(3) 党の決定に背いた者、(4) 正当な理由なく党の集会に出席しなかった者、(5) 党費を納めない者、である^⑮。ここでは、出身階級(層)に関する特別の規定はない。

この全国的再登録の期間中、農民を多く含む党組織の党員数は激減したという。たとえば、一九一九年の三月から六月にかけて、中央黒土地帯の四県の党員の六二%が党を去った。これに対し、ペトログラード市組織では、党員の四六%が離党したにとどまり、しかも労働者の多い地区では離党者は特に少なかったという^⑯。だが、この再登録によって離党した者の数を確定することはできない。このときの離党は、必ずしも再登録に起因するものではなかったからである。

一九一九年なかごろ、国内戦はソビエト政府側にとって危機的な段階に入り、党員は戦線に優先的に動員されることになった。このとき多数の党員が、戦線への動員を嫌って離党したといわれる。再登録、動員、ソビエト支配領域の縮小等が重なった結果、党員は一九一九年三月の三五万人から、同年八月の一五万人にまで激減したといわれる^⑰。

リグビーは、軍に関する章で、ソ連のペトロフの著作の数字を引用し、国内戦での党員戦死者の数を二〇万としているが、これは誤りであろう。前述のストルミリンによれば、一九一八年から二〇年までの党員戦死者数は合計四万九五一〇である^⑱。『ソビエト歴史百科事典』も、国内戦中に戦死したコムニスト(党員候補を含む)の数を五万以上と見積っている^⑲。五万人もの党員の戦死は、ただでさえ人材不足に悩んでいたロシア共産党にとって、大きな損失であったに相違ない。

一九一九年夏までに党員数は激減した。第八回党大会で決定された労働者と農民の積極的引き入れの実施は、いまや急を要するものとなっていた。そこで、党は一九一九年の後半、全国で「党週間 *партийная неделя*」を挙行了。この週

間中は面倒な手続きは一切省略され、募集集会在工場や兵營で開かれた。募集の対象は、労働者、農民、赤軍兵士に限定され、それ以外の者の入党は禁じられた。^④

党週間は、数の上では目覚ましい成功を収めた。一九一九年の一〇〜一二月に入党した者は二〇万を越し、そのうち半数以上が労働者であった、と公式報告は述べている。^⑤ 党週間終了後も黨員数はふえ続け、一九二〇年三月には六一万に、二年三月には七三万に達した（第1表）。党細胞が農村に広範に設立され始めたのも、この時期である。一九二〇年三月の第九回党大会の決定に基づき、党は多数の活動家を地方に派遣し、党細胞を倍増させた。^⑥

再登録による粛清と党週間による大量採用は、腐敗分子を都市と農村の健全なプロレタリア分子におきかえ、党の官僚制化の傾向を阻止するであろうと考えられていた。これらのプロレタリア分子の大半は、直ちに党機構と国家機構に吸収されたのである。

五八頁の第2表に戻ろう。ここでは、一九一九〜二〇年ごろの全黨員の四、五割を労働者が占めていることになっている。しかし、この「労働者」というのは、前述のように「社会的状態」であって、必ずしも「現在の職業」とは一致しない。この時期の黨員の「現在の職業」については包括的なデータがないが、一九一九年一〇月、一万七三二三人の黨員について党中央委員会が行なった調査の結果が参考になる。それによれば、彼らのうち一％だけが現在工場で働いていた。六〇％以上が国家や党の機構の職員であった。二七％が赤軍のなかにいたが、その多くが指導的職務についていたのではなからうか。

国家や党の機構内に吸収されたプロレタリア分子たちが腐敗分子に変質する危険については、当時の党指導者たちは、それほど大きな危惧をいだいていなかったように見える。無論、第八回党大会でジノヴィエフも表明した、最良の労働者といえども元の職場から長く離れるならば大衆から遊離してしまう、という認識を、党の指導者たちが完全に忘失してしまったわけではあるまい。だが、国内戦が一段落つき経済再建が日程にのぼせられた一九二〇年の春になっても、「共産

主義士曜労働」は活発化されたものの、労働者出の党員の定期的工場復帰のようなドラスティックな措置が実施された痕跡はない。他方で、この一九二〇年には、党員の上層部分の腐敗や大衆との遊離、また党員間の不平等の拡大などが目につくようになってくるのである。経済崩壊への対策に没頭していた党指導者たちの目は、党と国家の官僚制化傾向、大衆との遊離の傾向の方には、あまり向けられていなかったといえるのではなからうか。

リグビーは、党指導者たちの楽観的な見方を支えていたものとして、次のような点をあげている。——指導者たちは、都市や農村のプロレタリア分子は他の階層にくらべて官職の誘惑に屈することが少ない、という命題を受け容れ、またこれまで実施されてきた党員候補の制度等の効能に信頼を置いており、さらに、国内戦のさなか、政府が危機に瀕しているときに進んで党員となる者は、出世主義者ではなく、確信せる共産主義者に相違ないと考えていた、と。確かにそのようなことがいえるように思う。特に最後の点は充分な裏づけがとれる。^⑧

リグビーは次のようにもいう。一九二〇年八月一〇月に、単一の党員証の発行と腐敗分子の排除を目的として実施された二回目の全国的再登録中の離党の規模は、国内戦の後半、即ち一九一九年に信頼をおかれていた考え方や諸措置の妥当性に異議を唱えるもののように見える、と。^⑨

しかし、この点は問題がある。このときの離党者の総数は発表されていない。しかし、審査の不徹底のためか、離党の規模は、実際にはそれほど大きくなかったようである。キタエフによれば、離党率は中央ロシアの四二の郡で一〇%程度という。^⑩ペトログラード市では一〇%、モスクワの一地区では九%、工業未発達ウファ市では三四%、^⑪ニジェゴロド県では二七%、辺境のトルケスタンでは四二%であったという。大都市での離党者中にはホワイトカラー等も含まれていたであろうから、大都市の労働者でこのとき離党した者は少なかったのである。

また、離党者のすべてが、出世主義者のたぐいの腐敗分子であったわけではなからう。この再登録のさいには、自発的脱党者がかなりいた。クロンシュタットの党組織では、党員の四分の一以上が、このとき脱党したという。^⑫一九二〇年は

「戦時共産主義」的諸政策が一段と強化され、その矛盾面が露呈してきた年であり、党の政策に幻滅して脱党した者も多かったと思われる。第二回の再登録の結果だけから、先のような断定を下すことには無理がある。

だが、他方で、五八頁の第2表をよりどころとするならば、党の社会的構成それ自体について、次の結論を導き出すことは充分可能である。——党指導部は、一九一九年はじめ以降党の社会的構成の改善を試みたが、結果は、党指導部が意図したものは、およそ異なるものであったのである。

農民党员は一九二一年はじめまでに二八%に増大したが、肝心の労働者党员は、比率の上では、低落の傾向にあった。しかも、前述のように、彼らの多くはいまや仕事台から離れ、国家や党のヒエラルヒー内に吸収されていた。

「ホワイトカラー・その他」は、あらゆる障害にもめげず、しぶとく三割の線を保持し続けた。それは、いかにして可能だったのか。その理由の一端はすでに述べている。発展し、複雑化しつつあった国家と党の機構のなかでは、特殊な技能や知識をもったホワイトカラー党员が労働者党员に急速にとってかわられることはなかったのである。また、特に科学者や技術専門家には、レーニンやゴリキーなど、有力な保護者がついていた。^⑧

さらに、党週間による入党や再登録のさいの審査が、実際には必ずしも厳重なものではなかったことが知られている。^⑨ その間隙を縫い、革命前の自分の経歴を隠して入党する者も少なくはなかった。^⑩

また、党週間のさいの大量入党に逆の形で示されているように、労働者や農民は、入党のさいの面倒な手続きを嫌いだちであったが、ホワイトカラーは、それをいとわず、党员の資格や称号を真剣にとり扱う傾向があった。時期は下るが、一九二二年の第一回党大会で、当時工場長であったコルジノフは次のように述べている。労働者は入党のさい推薦状を集めてまわることを特に好まない。だが、「小市民・同伴者」については話は別であり、彼らはたとえ一〇通の推薦状でも喜んで集めるだろう。そして、入党後は、彼らはより高い地位を得る術を知っている、と。^⑪

だが、これら「階級的異分子」が党内で大きな力を保持していることを快く思わず、党の変質の危険性を声高に叫んで

いた一団がいた。主要な労働組合の幹部を含む「労働者反対派」であった。工業管理へのブルジョア専門家の導入への反対から出発したこの一団は、革命初期の党の理念や第八回党大会で採択された党綱領と決議に依拠して、一九二〇年中に強められた軍事的、中央集権的な工業・労働政策に異議を唱え、労働組合の地位の向上、労働者民主主義の拡大、国家と党の官僚制化の阻止、党の社会的構成の改善等を強く要求した。^{①②}一九二一年春のソビエト体制の内部的危機のただなかで、党指導部は、反対派の主張の一部を容認するに至る。かくして、一九二一年夏から、大規模な粛清が開始されるのである。

- ① Сельмой Экстремный съезд РКП(б), М., 1962, стр. 3-4, Л. И. Капчинков, В. П. Николаева. Некоторые статистические сведения о состоянии партийных организаций в 1918 году.—《Вопросы истории КПСС》, No. 1, 1961, стр. 123; Струмилин, стр. 277.
- ② В. И. Ленин и строительство...→, стр. 277.
- ③ КПСС в резолюциях..., т. 2, стр. 30-32.
- ④ 日本では「左翼共産主義者」が「国家」の「社会主義」を「社会主義」に「変換」した。→, 同書, 31.
- ⑤ Там же, стр. 32.
- ⑥ Там же, стр. 30; 《В. И. Ленин и строительство...》, стр. 65.
- ⑦ Там же.
- ⑧ Там же, стр. 66; Рыбзу, р. 71.
- ⑨ В. И. Ленин и строительство...→, стр. 67-68.
- ⑩ КПСС в резолюциях..., т. 2, стр. 127.
- ⑪ Восьмой съезд РКП(б), М., 1959, стр. 280.
- ⑫ В. И. Ленин и строительство...→, стр. 54.
- ⑬ Восьмой съезд РКП(б), М., 1959, стр. 61-62; Ленин. ПСС, т. 38, стр. 170. 『全集』第二九卷 一七三頁。
- ⑭ Рыбзу, р. 75.
- ⑮ Восьмой съезд РКП(б), М., 1959, стр. 279.
- ⑯ Там же, стр. 170, 212.
- ⑰ Там же, стр. 227-272.
- ⑱ Там же, стр. 204.
- ⑲ 日本では「社会主義」を「社会主義」に「変換」した。→, 同書, 31.
- ⑳ Там же, стр. 168-169.
- ㉑ Там же, стр. 294.
- ㉒ シンヴァエフのラーゼ(議事録にはない)を基礎にして、五名の委員が決議を作成することになったが、委員の一人オンスキーは、結局、決議作成に参加しなかった。→, 同書, 278, 489.
- ㉓ КПСС в резолюциях..., т. 2, стр. 77. 決議は大会議事録の末尾にも収録されているが、それらの指示は省略し、『決議決定集』の頁の「註」を記す。以下同。
- ㉔ Там же.
- ㉕ Там же, стр. 71.
- ㉖ Восьмой съезд РКП(б), М., 1959, стр. 280.
- ㉗ КПСС в резолюциях..., стр. 72.
- ㉘ Там же, стр. 72.
- ㉙ Там же, стр. 71.

- ①② Там же.
 ① Там же.
 ② Там же, стр. 72.
 ③ Восьмой съезд РКП(б), М., 1958, стр. 281.
 ④ КПСС в резолюциях... т. 2, стр. 51.
 ⑤ «В. И. Ленин и строительство...» стр. 153.
 ⑥ Ленин, ПСС, т. 36, стр. 178. 『全集』第二十七卷「二五〇頁」.
 ⑦ Сарт, vol. 2, pp. 186-187. 基調演説「第二卷」一三九—一四〇頁。
 ⑧ J. M. Meijer (ed.), *The Trotsky Papers*, vol. 1, The Hague, 1969, p. 280.
 ⑨ Восьмой съезд РКП(б), М., 1958, стр. 190, 205, 241, 544-545, 546.
 ⑩ КПСС в резолюциях... т. 2, стр. 77-80.
 ⑪ Там же, стр. 74.
 ⑫ Восьмой съезд РКП(б), М., 1958, стр. 197.
 ⑬ Восьмой съезд РКП(б), М., 1958, стр. 166.
 ⑭ Восьмой съезд РКП(б), М., 1958, стр. 166.
 ⑮ КПСС в резолюциях... т. 2, стр. 72.
 ⑯ «Правда», 24 апреля 1919 г.
 ⑰ Там же; Андрухов, ПС, 1917-1924 г., стр. 69.
 ⑱ Книгаев, стр. 178.
 ⑲ «Известия ЦК РКП(б)» No. 8, 2 декабря 1919 г., стр. 1.
 ⑳ Ю. П. Петров, Партийное строительство в Советской Армии и флоте, 1918-1961 гг., М., 1964, стр. 10.
 ㉑ Rigby, p. 232.
- ⑳ Струминин, стр. 273, таблица 60.
 ㉑ Советская историческая энциклопедия, т. 6, М., 1965, стр. 79. ちなみに、赤軍のなかでのコムラストの数は一九一八年一月より三万五〇〇〇、一九一九年九月より二万以上、一九二〇年八月より約三〇万、即ち全党員数の約半分を占めた(там же, т. 13, М., 1971, стр. 127)。
 ㉒ «В. И. Ленин и строительство...» стр. 99; Советская историческая энциклопедия, т. 10, М., 1967, стр. 890.
 ㉓ «Известия ЦК РКП(б)» No. 15, 24 марта 1920 г., стр. 1.
 ㉔ Струминин, стр. 277, таблица 63; «В. И. Ленин и строительство...» стр. 143-145.
 ㉕ «Известия ЦК РКП(б)» No. 15, 24 марта 1920 г., стр. 1. 無作為抽出法が用いられているわけではなく、情報・統計部は調査結果を全体の実像とあまり違わないものと見なしている。
 ㉖ Rigby, p. 82.
 ㉗ «Известия ЦК РКП(б)» No. 8, 2 декабря 1919 г., стр. 1; Ленин, ПСС, т. 39, стр. 224-225. 『全集』第三〇卷「五三—五四頁」.
 ㉘ Rigby, p. 84.
 ㉙ Книгаев, стр. 181.
 ㉚ «В. И. Ленин и строительство...» стр. 153; Rigby, p. 84.
 ㉛ Книгаев, стр. 182.
 ㉜ «В. И. Ленин и строительство...» стр. 153.
 ㉝ Bailes, pp. 46-53.
 ㉞ 前掲のヤンソフ「社会的状態」や「市民の職業」を、このころ混同させた。См. «В. И. Ленин и строительство...» стр. 149.
 ㉟ См. Десятый съезд РКП(б), М., 1963, стр. 75.
 ㊱ Диннадатый съезд РКП(б), М., 1961, стр. 466.

⑨ 労働者反対派については、拙稿「ネップへの転換局面」『史林』五
八巻二号、一九七五年三月、一一五—一三三頁参照。

⑩ 第一〇回党大会に提出された労働者反対派の「党建設について」の

テーゼと「労働組合について」のテーゼは、それぞれ Десятки членов
ПКИ(6), М., 1961, стр. 651-656, 685-691 に収録された。

結 び

ここでは、これまで述べてきたことを総括し、さらに一九二一年の肅清を望見する。今世紀初頭に提起された、少数精鋭の職業革命家からなる革命政党「労働者階級の前衛党」とレーニンの構想のなかでは、黨員がいかなる階級（層）の出身であるかということには、第一義的な重要性は付与されていない。他方、現実のボリシェヴィキ党は多数の労働者を包含していたが、党の上層部はインテリによって独占されていた。しかし、第一次革命以後、労働者の上層部進出とインテリの離脱が目立ってくる。この傾向は、一九一七年の年内まで続く。比率の面でも、労働者は一九一七年に全党員の過半数を保持している。だが、この年、多数のホワイトカラーと農民（兵士）が党内に流れ入ったのである。

反動期に縮小し一枚岩化したボリシェヴィキ党は、一九一七年に膨張し、大衆政党へと変貌した。しかし、黨員の量より質を重視する伝統は消えず、この年、一段と制限的な入党規則が定められている。もっとも、それは厳重に遵守されたとはいいがたい。実際には、しばしば集団的な黨員採用が行なわれたという。

権力を掌握したのち、党は、党内の秩序と規律の乱れの是正、とりいり分子の除去を目的として、さらに厳しい黨員採用策の実施を試みている。しかし、党が腐敗分子の排除と社会的構成の改善に真剣にとりくむのは、国内戦さなかの一九一九年春の第八回党大会においてである。

この大会では、党内での労働者の比重の低下、旧官僚層を含むホワイトカラーの比重の増大、国家と党の官僚制化傾向、要職にある黨員の横暴と腐敗、そしてそれらの結果としての党の労働者・農民大衆からの遊離の傾向が確認されなければ

ならなかった。これらの否定的現象をとりわけ声高に指摘したのは、元の左翼共産主義者たちであったが、党指導部も、進んでこの問題をとらあげ、大会は、党内の腐敗分子の排除と、労働者および農民、特にプロレタリア分子の積極的採用を定めて、一方では労働者大衆、他方では農民大衆との弱まった結びつきを再度強めようとした。一九二〇年末までに、再登録や党週間等の措置が実施された。しかし、党の社会的構成は、実際には改善されなかったのである。

労働者階級は四散しつつあり、党内での労働者の比率は減少する一方であった。また、労働者黨員の多くは、仕事台から離れて、膨張し複雑化しつつあった国家と党の機構に吸収された。労働者黨員の定期的工場復帰など、大衆との結合を意図した第八回党大会の決定は、実施されなかったようである。他方、行政的、事務的な知識と技能をもつホワイトカラーは、様々な制限的方策にもかかわらず党内に流入し続け、堅固な地位を確保していた。

このような状況のもとで、党がプロレタリアの性格を喪失しつつあるのではないかという声が党内で高まりつつあった。特に、一九二〇年に強化された、軍事的、中央集権的な工業・労働政策に反対していた労働者反対派が、党の社会的構成の改善をも強く要求していたのである。

労働組合論争の結着がつけられるべき一九二一年春の第一〇回党大会直前、政府と党は、革命後最大の内部的危機に直面しなければならなかった。すでに農民反乱は各地で起こっていたが、労働者すら、経済的政治的要求を掲げて、ストとデモの波を起こしたのである。これに続いたクロンシュタットの反乱は、黨員の一部をも巻き込み、党に大きな衝撃を与えた。

党中央は、これらの動きに対して抑圧と譲歩の結合した方法で臨んだ。各地の反乱は武力で鎮められ、メンシェヴィキとエスエルは政治的自由を完全に剝奪された。他方で食糧割当徴発は食糧税にかえられ、地方的規模での取引の自由が容認された。これがネップを呼び出すのである。^①

労働者反対派に対しても硬軟両様の対応がなされた。経済管理権を組合の手に渡すべきだという彼らの主張は、党の役

割を否定し、脱階級化して農民の影響下に入りつつある労働者大衆に経済の実権を引き渡す試みとして、厳しく非難された。第一〇回党大会は労働者反対派の思想の宣伝を共産黨員であることと両立しないものと宣言し、また党内での分派結成を禁じた。^②

同時に、党指導部は、反対派の批判に応じるような措置をとることを約束している。党内の諸問題について定期的な討論が行なわれることになり、また、長期間ソビエトや党の活動に従事している黨員を「機台と犁^{すき}」につける、即ち真接生産労働を行なわせることも定められた。そして、党内の非共産主義分子の一掃と労働者の徴募も決定されたのである。^③

政府と党の大衆からの孤立の明確な兆しが、党中央と反対派の見解を部分的に一致させたのである。党中央は反対派の主張の一部を認めて、彼らを党の統一へといざなった。他方で、労働者の離反は、党にとって深刻な脅威であり、いままや農民に取引の自由を与えることを定めた党は、労働者を農民の影響から引き離し、自分のもとに引き寄せる必要を強く感じたであろう。党と労働者の結びつきの強化のために、肅清がなされなければならなかった。

党の全般的肅清は、一九二一年八月から開始され、一部では翌年まで続いた。肅清にさいしては、特に、ソビエト職員とブルジョア・インテリおよび半インテリ出身の者に厳しい審査を行なうよう、指令がなされた。さらに、以前他党に属していた者、ツァーリの官吏であった者については特別の注意が命じられた。農民のうち、富農は入念に篩^{ふるい}にかけられなければならないが、貧農は党内にとどめおかれるべきであった。労働者については、形式上の手続きは最小限にまで省かれることになった。^④このようにはっきりとしたプロレタリア優遇策が指令されている。

一九二二年の公式報告によれば、肅清の結果離党した者は一五万九三五五人、全体の二四・一％にものぼった。その内訳は、除名二〇・七％、脱党二・六％、黨員候補への降格〇・九％である。^⑤主な除名理由は、規程違反（消極性〔党活動への不参加〕および党の指令の不履行）が三三・八％、黨員にふさわしくない行為（出世主義、酒浸り等）が二五・四％である。あとは犯罪行為（職権濫用、収賄等）、義務忌避（軍事と労働）などである。^⑥

離党者の社会的状態の内訳は、労働者が二〇・四％、農民が四四・八％、「ホワイトカラー・その他」が三四・八％（うち「ホワイトカラーおよび『自由職業』の者」が二三・八％、「その他および不明」が一・〇％）である。^⑧

粛清は、農民黨員に最大の打撃を与えたのである。他方、プロレタリアに寛大な措置がとられたにもかかわらず、労働者黨員の離党もかなり大きいことに注目すべきである。以前の粛清にくらべて厳しい審査がなされたのであろう。現場労働者で離党した者は、全体の一〇・四％である。^⑨

ホワイトカラーに対しては特に厳しい審査がなされたはずである。確かに、離党の比率は大きい、農民ほどではない。第一一回党大会は、従来以上にホワイトカラーに対して厳しい黨員採用規則を定めたのであるが、これもホワイトカラーを大幅に減少させるには至っていない。党内における彼らの比率は一九二一年から二四年までに、わずか三・六％しか減少しなかった（第1表）。

党の社会的構成を改善するためには、労働者の大量採用が必要であった。しかし、当時、党内には、レーニンを筆頭として、現実のロシアの「労働者」の「プロレタリア性」を疑問視する者が多かった。

レーニンは、第一一回党大会の直前、次のような見解を明らかにしている。——大工業企業で少なくとも一〇年間、労働者であった者のみを真の労働者と見なし、それ以外の者の候補期間を延長すべきである。ロシア共産党の大多数の黨員が、いま十分にプロレタリア的でないことは疑いない。「現実を目を閉じないならば、現在、党のプロレタリア的政策が、黨員によってではなく、党の古い親衛隊と呼ばれる極めて薄い層の絶大な、完全な權威によって決定されているという事実を認めなければならない。」^⑩ もはや大規模な粛清は行ないえないが、党は、入党制限を厳しくして、黨員数を三〇〇〇万以下にとどめるべきである、と。

レーニンの死後、一時期、現場労働者の大募集^⑪によって労働者黨員の比率が高まる。しかし、レーニンの厳しい「労働者」の基準に適合していたのは、彼らのうちの何割ほどであったろうか。また、彼らを採用した党の機構そのものが、凝

固の度合を強めつつあったのである。スターリンは書記局の機構を通じて着実に勢力を拡げていた。党の労働者化の波に乗って中央委員会に入った労働者党員の多くは、スターリンの息のかかった人々であった。しかし、スターリンは、のちに赤色専門家の重視に転じるであろう。

① 食糧税の導入については、前掲拙稿、また、門脇彰・荒田洋編『過渡期経済の研究』、日本評論社、一九七五年、参照。

② КПСС в резолюциях..., т. 2, стр. 218-224.

③ Там же, т. 2, стр. 211-213.

この決定がすべて実行に移されたわけではない。特に労働者民主主義に関する決定が実行されていないという抗議が、第一回党大会でなされたこと（такие же см. Однинадцатый съезд РКП(б), М., 1963, стр. 465）。

国家や党の活動に長期間従事している党員に肉体労働をさせるという決定については、詳細は不明だが、第一回党大会で一代議員がこれに触れている。彼は、「ソビエト諸機関、経済諸機関、その他の諸機関から、我々は六、七カ月間に一〇〇〇人の党員を下層に派遣した」が、これは党員拡大に役立っていないと述べている（там же, стр.

444）。これから察すると、実行はなされたが、その規模は小さかったであろう。

④ 《Правда》, 27 июля 1921 г.; 《Классовая ЦК РКП(б)》, No. 33, октябрь 1921 г., стр. 38-40.

⑤ Там же, No. 4 (40), 1922 г., стр. 20.

⑥ Там же, стр. 44-45.

⑦ Там же, стр. 21.

⑧ Там же.

⑨ КПСС в резолюциях..., т. 2, стр. 339-340.

⑩ Ленин. ПСС, т. 45, стр. 17-21. 『全集』第三三卷、二五五—二五八頁。

⑪ この大量採用は、明らかにレーニンの考えに合致しないものであったにもかかわらず、皮肉にも「レーニン記念入党」と呼ばれた。

（山口大学人文学部助教

the temporary yet real restoration of medieval town privileges and institutions forfeited under Charles V. It is our purpose to make clear the tragic role of the town, a sort of projecting part of traditionalism, compelled to be opposed even to Orangists, the same traditionalist but much more enlightened political group, in the process of the Revolt of which the fundamental contradiction consisted in the antagonism between absolutism aiming at unification and traditionalism advocating the cause of old corporative social order.

Социальный состав РКП(б) в 1917–1920 гг.

Соудзи Амакава

Большевистское традиционное уважение к качеству членов партии сохранялось после того, как большевистская партия превратилась в массовую и правящую партию. И правила о вступлении в партию стали строже с течением времени.

А РКП(б) впервые обратила большое внимание на свой социальный состав на Восьмом съезде в 1919 году. На этом съезде были подтверждены партией уменьшение удельного веса рабочих в партии, увеличение удельного веса служащих, тенденция бюрократизации аппаратов государства и партии, произвол и порча ответственных членов партии, и отрыв партии от рабочих и крестьянских масс.

Восьмой съезд РКП(б) решил исключить нехороших элементов и активно принять рабочих и крестьян с целью укрепления связи с массами.

Но, несмотря на то, что различные меры были приняты с весны 1919 года до конца 1920 года, социальный состав партии все же не улучшился. Пропорция рабочих членов партии все уменьшалась со временем. Кроме того, большинство из них постепенно всасывалось в ответственные посты государства и партии. Наоборот, служащие члены партии, опытные в административных и канцелярских делах, твердо придерживались своих неигнорируемых влияний в партии.